生成AIの効果的な活用

令和８年１月２９日
東京都教育庁総務部

1 生成AIの利活用に関するガイドライン・経緯等

(1) 初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver.2.0)(文部科学省　令和6年12月26日)

・ 学校現場における人間中心の利活用
学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味した上で利活用

(2) 都立学校生成AI利活用ガイドライン(Ver.1.0)
(東京都教育委員会 令和7年5月12日)

・ 教科等における学習活動の更なる充実

(3) 経緯

・ 令和5・6年度　生成AI研究校における研究開始
・ 令和7年度　全都立学校に生成AIサービス(都立AI)を導入

➡ **引き続き、生成AIを活用した授業の在り方を研究**

2 研究の目的

生成AIを効果的に活用し、思考力を深めながら、
個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る。

3 使用環境

(1) 都立AI(都立学校生成AIサービス)の特徴

・ 安心・安全な環境(AIの再学習不可、フィルタリング機能)
・ 校務・授業で活用できるAIメニュー(※)

※ AIメニュー（右図）
都立AIの中にある共有プロンプトで回答傾向などの設定も可能。
各教員が作成したAIメニューは全都立学校内で共有できる。

(2) 全都立学校導入時に作成した資料

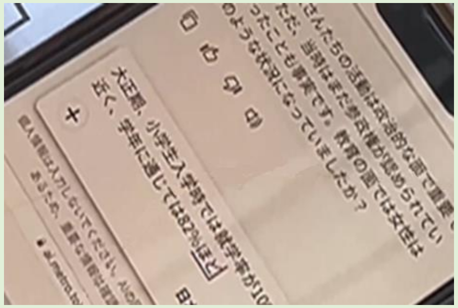
・ 都立学校生成AI利活用ガイドライン(Ver.1.0)
・ 生成AI研究校初回授業モデル学習指導案
・ 生成AIについて学ぼう
　※ 令和7年5月12日東京都教育委員会作成

◎ (参考)「とうきょうの情報教育　情報教育ポータル」
https://infoedu.metro.tokyo.lg.jp/

4 実践１「高等学校 第３学年　歴史総合『大正時代の社会の変化』」

生成AIを活用した対話的な学びと多面的・多角的思考力の育成

生成AIを反論者として設定し、生徒は資料を根拠に大正時代の社会変化や時代背景について考えを述べた。生成AIは反論を提示し、生徒は別視点から追加資料を用いて再考した。授業のまとめでは、単元及び本時のねらいに沿ったテーマに基づいて生成AIと対話を行い、思考を深めた。



生成AIといつでもどこでもできる対話的な学び

生成AIの活用により、生徒は一人一人の思考に基づいた対話が可能となり、多面的・多角的な思考が促進された。また、課題終了後も対話を続けて学びを深めたり、家庭学習においても本課題を継続して追究したりするなど、学びの時間的・場所的制約を克服することができた。

● AIメニュー名：958-4319「【開発】大正時代における社会変化や時代背景」

5 実践２「高等学校　第１学年　情報Ⅰ『情報デザイン』」

生徒一人一人の感性を言語化する「振り返り」活動

自分が作成したポスターを生成AIに読み込ませ、対話をとおして様々な視点から分析を行った。また、他の生徒のポスターから優れていると感じた点も同様に分析し、技術的な観点から整理した。その上で、自分のポスターの改善点を検討した。

「１対40」から「（１対１）×40」へ

従来の授業では、生徒一人一人の工夫点に着目し、きめ細かな振り返りを行うことは難しかった。生成AIの特性を生かして、生徒一人一人の工夫や努力に合わせたフィードバックを行うことで、感性を言語化する支援を行った。「１対40」で行う振り返り活動を「（１対１）×40」にすることで、教員の支援も、生徒の一人一人の感性や思考に寄り添ったものに改善できた。

● AIメニュー名：424-0409　「【開発】【情報Ⅰ】ポスター振り返り」

生成AIの効果的な活用

令和８年１月29日
東京都教育庁総務部

６ 実践３「高等学校　第２学年　情報Ⅰ『プログラミング』」

生成AIを活用し「解法の考え方」に集中するプログラミング学習

共通テストの試作問題を題材に、買い物をする際に、支払いとお釣りに使用する硬貨の枚数が最も少なくなる方法をプログラミングで考える活動を行った。従来のプログラミング学習では、言語の習得に時間を要したが、生成AIにプログラムコードを作らせることで、生徒は「どうやって問題を解くか」という解法の考え方に集中することができた。

生成AIをサポート役として活用

生成されたプログラムが意図通りに動作しない場合、生徒は問題点を考え、生成AIに改善を依頼する対話を繰り返した。友人との協働を通じて解決策を探る場面も生まれ、論理的思考力が育まれた。生徒は、生成AIを技術的サポート役とすることで、プログラミングの本質的な理解を深め、主体的に学ぶことができた。

● AIメニュー名：258-9383　「【開発】Pythonコード生成」

７ 実践４「肢体不自由特別支援学校高等部 第３学年 情報Ⅱ『情報社会の発展と情報技術』」

少人数の授業におけるディスカッションの活性化

情報技術の発展と情報格差について考える学習を行った。生徒は、生成AIと意見交換する活動を通じて、自らの考えを深めた。生成AIの多様な視点や反論、デメリットに触れることで、一人では行き詰まりがちな思考を広げることができた。これまでの生成AI活用に関する授業を踏まえて、スポーツ大会でのメンタル調整法や、進路関係の書類作成など、目的別に生成AIを積極的に活用している。

生成AIを活用したディスカッション

生成AIを活用することで、多様な意見に触れ、それをもとに自分の意見を再構築する力を高めることができた。情報の授業のみならず、論文の作成など他の教科においても大きな成長が見られた。

● AIメニュー名：788-6105　「【開発】生成AIと議論を深めよう」

８　研究成果及び指導資料

（１）研究成果

生成AIを活用することで生徒一人一人の思考の活性化を促すとともに、生成AIを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた実践事例を積み重ねることができた。また、指導資料として授業等で活用できるAIメニューを作成した。今後、全教科等においてAIメニューの充実を図っていく。

（２）指導資料

実践事例及び授業で活用できるAIメニュー

<AIメニュー例>

883-0506　【開発】１分間自己紹介
652-0852　【開発】古典_古語訳語
333-7390　【開発】社会性の学習「敬語を使おう」等

【参考】都立AIとの対話例（５　実践２より）

都立AI	「文字の配置や色使いで、伝わりやすくする工夫はどうですか？他のポスターにヒントはありましたか。」
生徒	「写真をもっと大胆に使用し、海の世界観を出したかった。」
都立AI	「なるほど。写真で海の世界観を強調する工夫の他に気付いた点はありましたか。」
生徒	「全体的に魅力的な言葉にするべきだった。魚の説明は、短く簡単にまとめればよかった。」
都立AI	「説明文の内容や言葉選びも大事ですね。他の生徒のポスターで参考になった表現はありましたか。」
生徒	「小さな翼で空を舞うという表現は、フォントも白で世界観が作られていてよかった。」

委員名簿

東京都立向丘高等学校	校長	三藤　政義
東京都立小岩高等学校	主任教諭	椋本　哲也
東京都立葛飾商業高等学校	主幹教諭	川崎　玉幸
東京都立日野高等学校	教諭	野村　友輔
東京都立小平南高等学校	主任教諭	小島　彰悟
東京都立光明学園	主幹教諭	袖山　慶晴
東京都立光明学園	指導教諭	禿　嘉人
担当:東京都教育庁総務部デジタル推進課 統括指導主事 中村 伸也		